日本中國學會報　第七十二集
二〇二〇年十月十日　發行　抜刷

明治時代における『三國志演義』の翻譯と出版

上田　望

明治時代における『三國志演義』の翻譯と出版

上田　望

はじめに

日本では『三國志』と言えば、歴史書の陳壽撰『三國志』のみならず、そこから作られた明代の小説『三國志演義』及びその二次創作を廣く含む呼稱であるが、『三國志』は一體いつから多くのファンの熱狂的支持を得るに至ったのであろうか。二〇〇六年に日本で三國志學會が設立されて以來、昭和後半から平成にかけての二次創作を含む多様な三國志文化の種々相が次第に明らかにされてきた。また江戸時代の受容については、長尾直茂氏の『本邦における三國志演義受容の諸相』としてまとめられた精力的な研究や、梁蘊嫻氏の插圖を中心とした研究などによって、過去を覆い隠す雲が取り拂われ視界良好になってきている。[1] しかしながら、近世江戸と現代を繋ぐ明治大正期における『三國志演義』の受容については、長尾氏や大橋義武氏の研究を除けば、まだまだ研究未着手で五里霧中の領域が多い。[2]

本稿では、明治時代四十五年間の『三國志演義』の受容の一斑を翻譯出版の面から明らかにし、近代日本における『三國志演義』の文化的意義について考えてみたい。

一　明治時代の出版統計と舊譯本の翻刻

最初に「表1　明治期『三國志演義』翻譯年表（稿）」から明治時代に出版された『三國志演義』の全體像を摑んでおきたい。各本の詳細は二節以下で觸れるが、明治四十五年間で出版された『三國志演義』の翻譯、刪節本、繪本、講談本、注釋書は總計六四點にのぼる。なおこの數は再版されたものも含み、筆者が確認できた活字本に限定している。

梁蘊嫻氏の研究[3]に據れば、明治期になってからも『通俗三國志』、『繪本通俗三國志』など江戸時代の木版本が少なくとも二回は出版されているが、これらは木版の和裝本であったと考えられるので、この統計には含めないことにする。

この表からわかるのは、明治一五年から二三年にかけて『三國志演義』翻譯出版の明治期最大の高潮期が來ていること、明治二四年から三八年までは出版點數が減少し停滯期を迎えていること、一轉して明治三九年から明治末年までは、第一次には遠く及ばないものの第二次高潮期が來ていることである。

明治の出版史研究については、鈴木敏夫氏や牧野正久氏が各種統計をもとに精密な分析を行っているが[4]、それらの先行研究に據れば、「洋紙に洋式印刷をし、洋式製本をほどこした洋裝本が出回りはじまるのは、ほぼいまの大日本印刷の前身秀英舍が創業した明治九（一八七六）年以降[5]」とされ、後述する永井德鄰和解『通俗演義三國志』は明治一〇年の刊行であり、他の出版社に先驅けて洋式印刷を導入したのであろう。明治一〇年以降に翻譯書出版ブームが起こり、明治二〇年に博文館が創業して出版業の近代化が進んだことも指摘されており、明治二〇年前後に『三國志演義』の舊譯の出版が盛んになったことはある程度それによって説明できる。このほか、前田愛氏は明治一四年に明治政府が文教政策を一變させ、儒教道德の復活をはかったために漢籍復刻ブームが起こったことを指摘するが[6]、『三國志演義』などの古典小説もその餘澤に與ったであろうことは想像に難くない。

しかし、明治時代の出版は明治二〇年以降も景氣の動向にほぼ左右されることなく右肩上がりで成長を續けていたことが各種統計から明らかで、單純に出版點數だけ比べても、明治四五年は總數四五二九六點と明治二〇年の一〇四五五點の四倍强になっており[7]、第二次高潮期とはいえ、『三國志演義』の出版點數の伸び率には些か物足りないものがあるのも事實である。

また、高島俊男氏は『水滸傳と日本人』の中で、明治において『水滸傳』が盛んに出版された時期が三度あり、第一次（一〇年代後半）、第二次（二〇年代後半）、第三次（四〇年代）の三つに分け活況を呈した理由を説明している[8]。『水滸傳』の出版社の多くは平行して『三國志演義』の翻譯出版も手がけているが、『三國志演義』の場合には二〇年代にそれほど出版點數が伸びを見せていないため、萠芽期、第一次高潮期、停滯期、第二次高潮期として、以下、それぞれの時期にどのような『三國志演義』の出版文化が花開いたのかを見ていく。

二　『三國志演義』活字印刷の萠芽期

明治になって最初の十年間は、幕末と變わらず木版本の『繪本通俗三國志』や『通俗三國志』、そして諸々の繪本が流通していた筈であるが、明治一〇年に『三國志演義』の邦譯として初めて活字印刷された『通俗演義三國志』が世に出る。

●『通俗演義三國志』四〇卷首一卷、永井德鄰和解、挹風館、和裝本

現存するものに、國會圖書館藏本、上田望架藏本などがある。

封面に「永井德鄰和解　初帙／通俗演義三國志／明治十年乙丑十月出版　挹風館藏」とあり、卷頭に「明治丁丑晩秋峰南迂夫撰」署名の「通俗演義三國志序」（二葉）を載せる。また、卷之四十の奥付には「明治十一年八月二十一日御屆　定價壹圓廿五錢／和解竝出版人　東京府士族　永井德鄰」とあり、以下須原屋茂兵衛をはじめとする取り扱いの東京の書肆名が列記されている。

序文では、人々から「附會之演説」と貶されていた『三國志演義』を辯護し、金聖嘆の才子書に關する見解を持ち出して、『三國志演義』は文意明快で歴史の理解にも裨益するところが大きいと述べている。それゆえ毛綸、毛宗崗批評『三國志演義』（以下、毛評本と略す）から金聖嘆僞序を取り出し、敢えて「峰南迂夫」序の次に載せたのであろう。またこの中に「知友永井簡齋、國文を以て之（著者注：「羅貫中之三國志」）を講釋し」とあり、この序を誌した「峰南迂夫」は、『維新奏議集』（明治一〇年常青堂刊、永井德鄰評・編、中村峰南閲）で永井德鄰とともに仕事をしたこともある中村峰南（謙）であると考えら

れる。永井氏については不明な點が多いが、明治七年刊行の『訓蒙日本外史』に校訂者として「長田德鄰」の名前があり、「挹風館藏版」の文字もあるので、明治初期の出版人と見てまず間違いなかろう。

序文に續き、清順治元年の金聖嘆序、凡例五則（明治一〇年九月識）、そして眞像三國志圖贊（河鍋曉齋縮寫、伊藤桂洲書、清風閣・萬青堂・挹風館合社）と題する二〇葉（四〇幅）の繡像、通俗演義三國志初編目次（卷一～卷八）、通俗演義三國志姓氏を載せる。この書の編集方針については凡例に詳しいので煩瑣を厭わず引用する。

凡例五則

一　本編ハ演義三國志ヲ和解シ專ラ童蒙ノ讀ミ易カランヲ欲スルニ因テ或ハ文字ヲ改更シ或ハ事實ヲ錯置スル所アルモ大意ノ如キハ更ニ之ヲ改メス

一　和文ノ漢文ト體裁異ナルヲ以テ行文中或ハ汰損增加スルナキ能ハス因テ取捨スル所アルモ事實ニ於テハ更ニ原書ノ意ヲ改メス

一　陳壽ノ志ト羅貫中ノ說トヲ以テ校訂スルニ因リ或ハ原書ト異ナル所アルハ斟酌取捨スルモノニシテ敢テ私意ヲ以テ添削スルニ非ス

一　專ラ童蒙ノ解シ易カランヲ欲スルニ因リ每回ノ目次ヲ二章ニ分チ且ツ姓氏錄ヲ揭クルモノハ羅氏ノ說ヲ斟酌スルナリ

一　帝紀及ヒ宗室ノ系譜ヲ揭クルハ讀者ノ便益ヲ謀ルナリ

この凡例では「童蒙」のためにわかりやすい改編を心掛けたことが繰り返し强調されており、元祿四年（一六九一）に開板された湖南の文山（經歷不明）らの『通俗三國志』の舊譯に基づきながらも毛評本の一節を取り入れ、全體に舊譯の和語を書き換えつつ平易な漢文訓讀調に改める傾向が伺われる。插圖については、『繪本通俗三國志』の葛飾戴斗畫を取り除き、明治を代表する浮世繪畫家河鍋曉齋に依頼し毛評本に據って三國の英雄の繡像に差し替えを行っており、舊態の和裝本ではあったものの、明治という新しい時代の幕開けに相應しい出版物になっていた。

三　『三國志演義』の明治第一次高潮期

（一）清水市次郎和解『繪本通俗三國志』の登場

永井譯『通俗演義三國志』は明治の『三國志演義』の先驅けであったが、その後、『水滸傳』高潮期とも重なる『三國志演義』第一次高潮期では、明治一五年から二三年までの九年間に再版されたものも數えると三七點の書が出版されており、明治における『三國志演義』出版の最盛期と言っても過言ではない。これらの翻譯の多くは文山の舊譯を活字本にしたものであるが、中には文山譯を改寫した作品もありバラエティに富んでいる。永井譯に次いで二番目に出版されたのは清水市次郎和解と稱する『繪本通俗三國志』である。

●『繪本通俗三國志』五十卷一七册、清水市次郎和解、大蘇芳年、水野年方圖畫、明治一五～一八年、和裝本

現在所藏が確認できるのは、國會圖書館藏本、鶴見大學圖書館藏本A・B、上田望架藏本A・Bである。

本書は、譯者については全册一貫して清水市次郎和解となっているが、出版人・書店は次から次へと變わっているため後で整理することにしたい。清水市次郎和解の『水滸傳』については高島俊男氏の考察がある。[9] また、本書については梁蘊嫻氏の專論が最近公表されており、清水市次郎が明治一五年四月から定期刊行していた『咸唐題庫』

という小説册子の奥付や廣告などの情報を丹念に分析し、清水が經營問題に直面し出版協力者を法木德兵衞、武田菱花堂などに變更しながら、最終的に明治一七年六月に該書を完成させるまでの奮闘を浮き彫りにしている。また、附された月岡芳年、小林年參、水野年方の插圖を同時代の競爭相手であった著作館、潛心堂及び東京同益出版社の插圖と比較し、繪の題材選擇に獨自性を出そうとしていたことを明らかにしており、明治前期の『三國志演義』の翻譯狀況に初めて眞正面から切り込んだ貴重な研究と言える。[10] ただ調査對象が『咸唐題庫』と國會圖書館所藏本に限られているため、その他の所藏本も合わせ書誌情報を簡單に整理したのが「表2　清水市次郎和解『繪本通俗三國志』の諸本」になる。なお、この表の中で「全五〇册」「全一五册」「全一七册」とあるのは、各卷の奥付で『繪本通俗三國志』が何册で完結するかを豫告している數字であり、實際には一七册で完結している。

『咸唐題庫』發行から一七册完結までの流れを見てみると、清水市次郎は明治一五年四月六日に出版御屆を出して法木德兵衞と一緒に『咸唐題庫』を月三回毎册四錢で販賣し始める。明治一五年一〇月六日前後に一六號を出版し、出版開始から五ヶ月で『三國志演義』全二四〇則のうち第一七則まで進んだということであり、この出版ペースでは完結まであと一年半を要する計算になる。清水市次郎による『三國志演義』や『西遊記』、『水滸傳』の活字印刷による翻譯本は、當時、永井德鄰本などを除けば最も早いものであったが、色々な小說が一册で樂しめるという設計が災いして進行が牛歩の如く遲く、後發組の出版社が活字印刷を導入すればいくらでも追い付くことが可能であった。事實、潛心堂・小笠原書房は明治一五年一二月一一日に出版屆を出し、翌一六年二月には洋裝四册本の出版を完了してあっという間に抜き去っている。清水側でも配本の頻度を上げないと讀者を他社に奪われるという强い危機感があったものと見え、翌一六年一月五日から最後の六五號を出版し『咸唐題庫』を廢刊するまで月四回または六回のハイペースで出版していた。そして『咸唐題庫』廢刊を契機に清水市次郎は法木德兵衞とは袂を分かち、明治一六年八月から卷五（第五册）以降は合本として看可樂堂から新本の『繪本通俗三國志』を出版していく。この舊本から新本へと變わる時期は少し事情が込み入っているので整理すると、

卷三（第三册）卷七～卷九　明治一六年七月七日　全五〇册
卷四（第四册）卷十～卷十二　明治一六年八月二七日　全一五册

となり、五〇册で完結する豫定だった卷一から卷三までを舊本とし、卷四第四册からは一五册で完結する新本に出版形態を變えている。その後も關係者の交替は續き、卷一一（明治一六年一二月一七日出版屆）では看可樂堂から菱花堂にまたしても發行元が變わり、卷一二（明治一七年六月一一日出版屆）では、武田平治が出版人として初めて關係者に名を連ねる。この時に全一五册では無理だった出版計畫を修正し、全一七册に改めてなんとか完結にこぎ着けている。

さて、國會圖本、鶴見大圖本A・B、上田架藏本A・Bの五本の關係についても少し言及しておく。

卷一第一册については、この中で最も古いのが上田架藏本Aであり、明治一五年九月二六日別製本屆と奥付に記されているので、『咸唐題庫』を製本して作ったものであるかもしれない。そしてそれより少し後に明治一五年一〇月二五日の出版屆で奥付だけ改め、最初から合本として出版されたのが國會圖本である。そして更に明治一六年三月二五日の出版屆で出版されたのが上田架藏本Bであり、これは國會

圖本第二册が出るのと同じ頃に合本として再度出版されたのであろう。鶴見大圖本Bは後で述べるように明治一八年の序文があり、卷一を缺く鶴見大圖本Aを除く四本の中で一番遲くに出版されたと考えられる。

やや特異な鶴見大圖本Bを除けば、卷四以降はどれも同じ時期に出版されたものであるが、卷三については鶴見大圖本Aは明治一六年三月二五日に出版屆が出されており、合本としてはなぜかこれが最も古い。鶴見大圖本Bは國會圖本、上田架藏本A・Bと字體や紙質が異なり、分回も所々ずれている。更に、鶴見大圖本Bのみに第一册卷頭に他本にはない湖南文山識の「通俗三國志序」（二葉）が掲げられており、序の末行に「明治乙酉第一月　應需　前了古了之書」との署名がある。明治乙酉は明治一八年に當たり、現存する鶴見大圖本Bは一一册とも全て清水・武田・菱花堂の連名で出版されており、また出版屆の時期がいずれも「明治十□年屆」となっているが、恐らく明治一八年頃から順次刊行されたと推測される。なお、この文山の識語を筆寫した人物は幕末から明治初期にかけて活動した、歌川派の浮世繪師にして通俗作家の隅田了古ではないかと思われる。

挿圖については、各册冒頭に掲げられている大蘇（月岡）芳年の彩色の口繪が「賣り」であるが、本文中にも毎卷四から五幅の挿圖があり、これらは『繪本通俗三國志』の葛飾戴斗畫とは場面・構圖が異なるものが少なくない。第一〇册までは本文中の挿圖に年參の署名があることから大蘇芳年の門人であった小林年參が繪筆を執り、第一一册以降は年方の署名が出てくることから芳年の高足であった水野年方が擔當したと考えられる。[11] ところが不思議なことに、鶴見大圖本Bでは前半も水野年方に改めて作畫を依頼したらしく、國會圖本や上田架藏本の挿圖を悉く水野の繪に差し替えてしまっており、また所々見開き二頁あるいは一頁を使った他本にはない躍動感溢れる挿圖が追加されている。現存する鶴見大圖本Bは六册缺けているが、恐らくその缺を埋めるために何者かが別途入手してきた六册が國會圖本と同版の鶴見大圖本A六册であり、そのため挿圖だけは木に竹を接いだようなおかしな事になってしまっている。

清水市次郎の和解本は、本文に關しては幕末の池田東籬亭の『繪本通俗三國志』で加えられた句點を全て削るなど讀みづらくなっている面もあるが、挿圖に力を入れる方針を含め、これ以後、多くの追隨者を生んだ。

四　『三國志演義』の明治第一次高潮期

（二）洋裝活字本の臺頭

清水市次郎和解本について見てきたが、第一次高潮期に出版された清水本と關わりの深い書籍や特徴のある出版物について見ておく。

●『繪本通俗三國誌』七册（初編上下、二編上下、三編上下、四編上）、岩城勝藏翻刻、著作館、明治一五～一七年、和裝本

國會圖書館藏本（存五册）、東京大總合圖書館藏本（存七册）、東京大東洋文化研究所藏本（存五册）、上田望架藏本（存六册）がある。

初編上は明治一五年一一月一六日に翻刻屆を出し、同年一二月一日に出版發賣されている。初編下は明治一六年二月二五日、二編上は三月二三日、二編下は五月二日、三編上は三月二八日、三編下は一一月二七日、となっている。

初編上の卷頭には湖南文山の原敍（明治壬午［一五］初冬六石居士英

之書)、池田東籬亭の繪本通俗三國志序、插圖六頁、繪本通俗三國志初編總目錄、姓氏、或問が置かれ、續いて二編上の卷頭には快雪堂東軒の識語(明治癸未[一六]第一月　鼎湖散人原田垣書)、插圖四頁、繪本通俗三國志二編目錄、三編上には卷頭に賴山陽の三國史三篇序、插圖四頁、繪本通俗三國志三編目錄がある。

この著作館本の特色は、江戸天保年間に上梓された池田東籬亭編、葛飾戴斗畫の『繪本通俗三國志』を日本で初めて活字印刷したものであるという點にある。變體假名は一部改められているものの、句點やルビ、平假名表記などは東籬亭本『繪本通俗三國志』を基本的に踏襲している。ただし、分卷本の形式を取らない(初編上のみ「卷之一」という言葉が見えるが、それ以降は「卷」という言葉を用いない)點や、葛飾戴斗の見開き二頁の插圖を縮寫している點など細かな異同はある。結局、舊譯を活字にしただけで特色が無いとも言え、殘念ながら最後まで出版できなかったようである。

●『繪本通俗三國志』初・二編各一〇册、中村賴治增補、東京同益出版社、明治一六年、和裝本

現在、國會圖書館藏本(初・二編)、上田望架藏本(初編存卷五・六、二編)が確認されている。

初編・二編の封面に「湖南文山譯述　中村賴治增補　頭書增補　繪本通俗三國志　東京同益出版社」の文字がある。初編では卷一〇にのみ奥付があり、それに據れば「明治一五年一一月一二日出版御屆　同一六年七月出版」とある。二編の奥付でもほぼ同じ記載が見られることから明治一六年七月までに初編と二編が出版されたのであろう。初編の卷頭には、賴山陽の三國史三篇序、插圖六幅、姓氏、或問があり、各卷の目錄、二編の卷頭には湖南文山の繪本通俗三國志序、插圖六幅、各卷の目錄がある。體裁は一見、池田東籬亭本を忠實に模倣しているように見えるが、初編と二編二〇册に一〇〇則分の本文を詰め込んだために、東籬亭本とは編數卷數がずれてしまっている。

初編の卷頭圖には署名は見あたらないが、二篇の卷頭圖には「樫湖」の印があり、二編卷三の奥付から矢野西洲、小林樫湖の兩名の手になると考えられる。插圖は葛飾戴斗畫と構圖がまま異なり、また二篇卷二の奥付に「每册四圖或は五圖」とあるように東籬亭本から半分近く減らされている。奥付や封面で「片假名」と銘打っているように、東籬亭の『繪本通俗三國志』で本文が漢字片假名から漢字平假名になったものを、再度漢字片假名に意圖的に戻したのであろう。東籬亭の識語は省略するなど、東籬亭本に對抗し元祿期の『通俗三國志』を復元しようという狙いがあったのかもしれない。

東京同益出版社本のもう一つの大きな違いは、「頭書增補」と封面にあるように、眉欄に中村氏による注釋が加えられたことである。注釋は正史の『三國志』を材料にしたものがほとんどである。また、「祭天地桃園結義」の三葉bの「淸本に中平元年疫氣流行す」、「黄夫恐くは誤りならん。淸本黄天に作る」という二條の注のように他の『三國志演義』の版本と比較した校注も時折見られる。ただ眉欄の注釋は後ろにいくほど少なくなり、初編の卷八、九、一〇では各々僅か一條、二編では皆無となる。奥付から全五編五十册で完結させる計畫であったようだが、三編以降はその存在が確認されていない。

なお、國會圖書館藏本と上田架藏本は同版と思われるが、二篇一の奥付は日付こそ同じ明治十六年七月出版であるが、國會圖書館藏本では全五十册で「新書定價六圓」、上田本では、「壹册を壹輯となし壹輯

正價金廿五錢宛」となっている。これは中村賴治がさらに値上げしようと二篇の奥付を差し替えた可能性が高い。

●『通俗繪本三國志』五〇卷四册（上卷壹貳、下卷壹貳）、前田長善、潛心堂、小笠原書房、明治一五～一六年、洋裝本

現存するものに國會圖書館藏本、弘前大圖書館藏本、上田望架藏本がある。

上卷貳の奥付に「明治一五年一二月一一日出版御屆／同年一二月出版」とあり、下卷貳の奥付には、「明治一五年一二月一一日出版御屆／同一六年二月出版」とあり、それぞれ「金貳圓」の印があるので各二册二圓で發賣されたのであろう。上卷壹の卷頭には、人物像十幅、上卷目錄、姓氏、或問が置かれているが、敍の類は一切省かれている。また、本文中の插圖は全て見開き二頁のかたちを取り、葛飾戴斗畫と酷似しているが、東籬亭本に比べると三分の一以下に減っている。下卷壹には人物像八幅、下卷目錄が正文の前に置かれている。

插圖の繪師については、人物像に「生田芳春寫畫」（司馬炎）、「朝香樓芳春寫」（陸遜）などの署名が見える。生田芳春は、名は幾三郎、後に歌川國芳の門人となり、畫姓は歌川、畫號には一梅齋、朝香樓などがある。文政一一年の生まれで、明治二一年に亡くなっている。[12]

この本の特筆すべき點は、先にも述べたようにこれが『三國志演義』の翻譯で初めて洋裝本として出版されたということであろう。和裝本はこの後も斷續的に出版されるが、潛心堂本のように縱一九センチの比較的小型で廉價な洋裝本は、その白黑のはっきりした插圖とともに『三國志演義』の翻譯の主流となっていく。

明治一五年出版の潛心堂本以降、明治二一年までの間に出版された洋裝活字本としては、成文社本、文事堂本、鶴聲社本、金泉堂書房本、銀花堂本が繰り返し出版されるが、これらは先行の出版物から色々と影響を受けていたことが見えてくる。

一點一點詳しく述べることはしないが、興味深いのは成文社と文事堂の活動である（「表3　成文社と鶴聲社の『通俗繪本三國志』參照）。

上原東一郎と成文社は、明治一七年一二月（二六日）に届けを出し、三〇册三〇卷を毎册一〇錢で定期的に出版し『繪本通俗三國志』を完結させようとする。國文學研究資料館藏本がこれであろう。成文社は潛心堂・小笠原書房の『通俗繪本三國志』四册五〇卷を利用する一方で、清水市次郎のように小册子を定期的に出版・販賣する方法を採り、分册本にする豫定で三〇册三〇卷に改めたようである。國會圖書館に所藏される六册本はこの三〇册三〇卷の册子を五卷ごとに製本したものと考えられる。この初版本を成文社本Aとする。成文社印の小册子は明治一八年一月から順次出版され、五月に卷三〇を印刷し五ヶ月という短期間で全卷を出版し終えている。しかしながらこれには裏があり、成文社本Aは明治一五年の潛心堂本と比べると「敍」と稱する文山識語を缺くほかは酷似している。特に人物像は潛心堂本のものをそのまま借用したようで、「生田芳春」の署名が殘っている。初印の賣れ行きが良かったせいであろうか、成文社は翌六月に間を置かずすぐに二册の合訂本として三圓で發賣したのが成文社本Bである。これもよく賣れたためか、目錄と人物像十八幅の順番を入れ替えて出版したのが成文社本Dと思われる。成文社本Dは上册しか殘っておらず、出版年は不明である。ところがこの三種類の本以外に不思議なものがある。一つは成文社本Eであり、この本は扉には「國民の本筐／通俗繪本三國誌／東京　成文社」とある。活字の字體を含めBと全く

同じであるが、背表紙には「帝國文庫　通俗繪本三國誌」とある。帝國文庫は博文館が明治二六年から出版し始めた文學書シリーズであり、さっそく明治二六年に帝國文庫の第一一、一二編（册）として『校訂通俗三國志』が出版されているが、これは成文社本とは明らかに別の『三國志演義』の翻譯本に據っている。Eは下册のみ存し、なぜか奥付を缺くが、博文館と關わりのないこの本が何故「帝國文庫」を標榜するのかこれ以上確かめようがない。もう一つは上田架藏本Cである。上下二册あり、上册の扉には「通俗繪本三國誌」の文字があるだけで、他本のように「東京成文社印行」や「國民の本筐」の文字はない。そのあとに敍、目錄、人物像、姓氏、或問が正文の前に附されている點はDと同じであるが、生田芳春の署名は悉く無くなっており、特に周瑜や姜維の像ではもともとの繪では署名が背景の中に書き込まれていたため、上手く文字を消せず見え消しのように署名が讀み取れる。版面はDとそっくりであるが、使われている活字は異なっているので新たに文選・植字して印刷したものである。恐らく明治一八年以降に成文社と上原の間で何かトラブルがあり、どちらかがDに手を加え出版したのがCなのであろう。そこまでしても出版するのはやはり『三國志演義』の翻譯の賣れ行きが良かったからに相違ない。それにあやかろうとしたのが、鶴聲社が價格四圓で賣り出した『通俗繪本三國志』である。この本は明治一八年四月八日に出版届が出され、翻刻兼出版人は森仙吉、發兌は鶴聲社となっているが、成文社が明治一八年六月に出版した國會圖書館藏本Bと判で押したように同じである。鶴聲社は成文社の『通俗繪本三國志』に注目し、成文社が卷三〇まで出版するのを待たずに出版届を出したが、自分のところで一から出版することはせず、成文社と交渉して印刷を委託したか、鉛版紙型か何かを讓渡してもらったと考えれば、Dが一から印刷し直したことも辻褄が合う。

成文社が手を替え品を替え『三國志演義』の異なる翻譯本を出版していたのとほぼ同じ時期に、文事堂も短期間に何度も出版している（「表4　文事堂の『通俗繪本三國志』」參照）。

文事堂が最初に出版した『通俗繪本三國志』は國會圖書館藏本の上下二卷（册）本である。奥付から翻刻出版人は市川路周で、文事堂と小笠原書房が協力して出版したことがわかる。上田望架藏の初版本は下卷のみ存するが、國會圖書館藏本の下卷と版面は同じである。ただし上田架藏本は線裝本で六册仕立て、國會圖書館藏本は洋裝本という裝幀の違いがある。潛心堂・小笠原書房本と同じように五〇卷本のスタイルを踏襲し、上下册（卷）の卷頭附錄には人物像一八幅、目錄が分けて掲載され、上册のみに繪本通俗三國志姓氏、或問がある。人物像に朝香樓生田芳春の署名がある點も同じである。

再版本は二年後に出版されているが、發兌は文事堂單獨になっている。奇妙なのは次の三版である。國會圖書館藏本の三版Aと上田望架藏の三版Bは一見同版のようであるが、版面と頁數が異なり別個に印刷されたものである。三版Aだけは他の文事堂本と異なり、奥付に「大賣捌鬼屋誠」の文字が加わっている。また上田架藏の三版Cは二册本と四册本があるが、三版の届で「明治二十二年一月印刷」とある。これもAやBとは別物であり一頁に十九行も詰め込んで非常に讀みづらくなっているほか、附錄から「姓氏」を削るなど細かな異同がある。本來なら出版届を出して五版として印刷すべきもののように見える。國會圖書館所藏の四版は下卷の奥付に「明治二〇年七月出版」とあり、これが本當なら四版は三版Cよりも先に出版されている筈で

あり、三版Cで削られた「姓氏」が四版にはあることからも三版Cは四版に據って出版されたのではないかと推測される。文事堂の諸本は初版から四版まで一つとして同じものがないが、價格だけは初版から据え置きのまま一頁に印刷する字數を增やし、經費削減と書籍の小型化を進めており興味深い。明治二一年九月の野村銀次郎と銀花堂が最初に出版した『通俗繪本三國志』全一册は、長崎齋臨笑の敍や月岡芳年、水野年方の畫を適宜描き直し載せているが、本文自體は文事堂本に近いという一風變わった書である。

上記の諸本は潛心堂・小笠原書房の系列に屬すが、明治二〇年に靑柳國松や金泉堂が出版した『繪本通俗三國志』はいずれも長崎齋臨笑の敍や月岡芳年と水野年方の署名がある插圖を載せ、また二段組の版面になっており、恐らく淸水市次郎和解本を利用している。價格はいずれも四圓五十錢と成文社や文事堂本より若干高い。

これら『繪本通俗三國志』と別路線で、無圖の『通俗三國志』の活字本を作り出そうとする動きもあった。數は多くないが、明治一六年一〇月一〇日に翻刻御屆が出された鈴木義宗・武田政吉翻刻の『通俗三國志』五〇卷一〇册本や、明治一七年に長野の信濃出版會社と內山昇から出版された『通俗三國志』五〇卷一五册の和裝本などがそうである。

また、この時期、小册子の繪本や刪節本も登場した。この手の書物は江戸時代から色々と作られてきたが、明治においても近代出版技術で新しい繪本が作られている。

●『三國志銘々義傳』二册、鳥越安久里之助編、葛飾正久筆、小宮山昇平、東洲堂、明治一六年、國會圖書館藏本

●『三國志』一册、小宮山五郎編、金榮堂書屋、明治一七年、上田望架藏本

●『繪本三國志　通俗略傳』一册、大川新吉編、明治一七年、國會圖書館藏本

●『繪本三國志小傳』一册、武田平治編、大蘇芳年畫、菱花堂、明治一八年、國會圖書館藏本

●『三國志』一册、小宮山五郎編、明治一八年、國會圖書館藏本

●『繪本三國誌』一册、尾關トヨ編、明治一九年、上田望架藏本

●『繪本三國志』一册、牧金之助、明治二一年、國會圖書館藏本

これらは「繪本」と呼ぶに相應しく、翻譯本とは異なり極めて文字情報が乏しい。その多くは和裝の袖珍本である。插圖は木版畫と銅板畫の二タイプがあり、人物像中心のものと物語の場面描寫から成るものがある。殘念ながらこうしたお手輕な繪本は明治二一年の牧金之助の『繪本三國志』を最後に市場から姿を消したようである。

繪本ほどではないが、全譯を簡略化した刪節本についても少し觸れておく。この時期、というより明治時代の代表的な『三國志演義』の刪節本は明治一八年に出版された月の舍秋里編述の『繪本通俗三國志』一種類しかなく、全譯なら千數百頁になるところを物語の骨格部分だけ拔き出して改作し、わずか二六二頁の讀物に仕上げたため、その後何度も版を重ねた。明治一九年の再版までは和裝本三册であったが、明治二二年東京漫游會發兌本、明治二三年大坂偉業館・岡本支店發行本、明治二三年銀花堂發行本などは洋裝本になっている。他に讀みやすい刪節本が作られなかったこともあり、その後も袖珍本などに體裁を變えつつ、東京や大阪などで繰り返し出版されることになる。

五　『三國志演義』出版の停滞期と第二次高潮期

第一次高潮期が過ぎ去った後の明治二四年から三八年までの十五年間、『三國志演義』の出版景氣は踊り場の局面を迎えていた。ただ、すでに述べたように博文館は明治二六年に帝國文庫シリーズとして『校訂通俗三國志』の活字本を出し、明治四五年には第十五版が出版されていることから、實際にはかなりの翻譯が印刷されていたと考えられる。この帝國文庫シリーズの『三國志演義』はその後小型化し、昭和一五年まで出版され續けたまことに息の長いロングセラーであった。

この時期特筆すべきは、數こそ少ないものの注釋書や講談本、刪節本、繪本など様々な『三國志演義』が出回るようになったことである。

明治三三年三月五日に刊行された『支那小說譯解』第二册は國會圖書館に所藏されるが、本書には『三國志演義卷一』が收錄される。內題次行に「東海馬場讓得卿先生閱、碩田井上新士德譯」とある。この譯者は明治三一年發行の第一册の中で『水滸傳譯解』も擔當しており、高島俊男氏が指摘するように發行者でもあった井上新一郎という人物であろう。[13] 卷頭に明治三一年四月の「三國志演義譯解序言」があり、『三國志演義』の成立の過程について粗述し、『三國志演義』と『水滸傳』は羅貫中の作とこれまで言われてきたが、その文章と構造は明らかに異なっており、同一の人物の手になるものとは思えないと指摘している。兩書の譯解に携わった井上氏の慧眼と言えよう。譯注は、毛評本の原文に返り點送り假名を附し、その後で難しい語彙について解說し、當該段落の大意をまとめており、毛評本第二回で終わってしまったことは殘念である。こうした地道な讀解の取り組みは、間接的に第二次高潮期において、學術研究に重きを置いた久保天隨や幸田露伴の翻譯が登場して來るための道を切り開いたとも言える。

明治の藝能において三國志物語がどのように取り上げられてきたのか詳しく論ずる紙幅はないが、語り物の世界では桃川燕林（一八三二～一八九八）などの名人が『三國志演義』の講談を高座で披露し、その速記錄が活字になったのが、明治三一年に文事堂から出版された『三國志』七册である。第一册（卷）卷頭には彩色の見開きの桃園結義圖（落款には「學雲」とある）や第四册（卷）には生田芳春の畫を載せるなど、讀み物化した講談本であろう。文事堂は明治二〇年に『通俗繪本三國志』の第四版の出版を最後に『三國志演義』の翻譯出版からは手を引いているが、講談本は別であったようであり、です・ますの調でところどころ太閤秀吉だの幡隨院長兵衞だの脫線する親しみやすい語り口は、普段はあまりお堅い小說を讀まない層の耳目を集めたことであろう。明治、特に前半の三十年間は現代とは違ったかたちで、日本における『三國志』熱が最も盛り上がりを見せた時期であったかもしれない。

第二次高潮期は明治四〇年前後に始まる。日露戰爭勝利後、自國への自負心から日本文學が見直され、それに牽引されるように中國古典の出版業界も活氣づき、明治三九年から明治が終わるまでの六年間に一五點の『三國志演義』が出版されている。この時期の特徵としては翻譯の多樣化と學術研究の出版への影響が擧げられよう。兩者は密接に關連しているが、その典型的な例としては久保天隨や幸田露伴の仕事がある。

久保天隨（得二）は明治三九年に『三國志演義』（支那文學評釋叢書第一卷、隆文館）を出版し、この中で抄譯ではあるが初めて本格的に毛評本に基づいて『三國志演義』を翻譯し紹介している。またこの書の冒頭に置いた「小引」及び「發凡」の中で久保天隨は多岐にわたって『三國志演義』に關する考察を展開している。その一部をここに紹介すると、まず天隨は冒頭から「三國志演義は、決して、支那小說の巨擘として推稱すべきものに非ず、唯だ演義體として稍や可なるのみ」と『三國志演義』を低く評價し『水滸傳』には及ばないとする。一方で彼は毛評本の「文法」、「評語」は「東洋に特有なる美の觀念に本づきし」ものとして一定の評價を與え、さらに『三國志演義』の版本や作者、毛評本や金聖嘆序についても考究している。その中で天隨は清代において最も廣く讀まれていた毛評本について毛綸の『琵琶記』の評と比較し、また毛評本に見える金聖嘆序や「讀三國志法」を分析した上で金聖嘆の文學理論との矛盾點をつき、金序が僞物ではないかと述べている點は瞠目に値する。このほかにも日本と中國における『三國志演義』の評價について明快に論じており、瀧澤馬琴や賴山陽の見解も一刀兩斷にされている。

明治四四年には幸田露伴が『通俗三國志』（日本文藝叢書、東亞堂書房）を出版するが、この書は「新訂」を謳うものの本文自體は舊來の『繪本通俗三國志』の燒き直しで、しかも插圖は全く無くあまり新味がない。ただし卷頭に「新訂通俗三國志解題評說」という解說を置き、その中で露伴は毎章の標語を李卓吾本、金聖嘆本（つまり毛評本）と比較し、「今の繪本三國志は李本に依るに似たり。」と『通俗三國志』の底本が李卓吾本ではないかと推測している。

その翌年の明治四五年から久保天隨は本邦初の毛評本の完譯『新譯演義三國志』を公刊する。文語調の書き下しに近い譯ではあるが、毛評本の本文が初めてほぼ完全な形で譯出されたという點で高く評價されてしかるべきであろう。

卷頭に置かれる「敍說」は明治三九年に出した『三國志演義』の「發凡」を發展させたものであり、（一）の「演義三國志の作者」から（八）の「予が新譯の趣旨」まで隨所に天隨の『三國志演義』についての深い造詣が伺える。中でも（七）「日本文學に及ぼせる影響」では幸田露伴の「評說」を參考に、『通俗三國志』の譯者を「發凡」では高井蘭山としていたのを文山に改めている。また、『通俗三國志』の底本についても、露伴の說をうけて李卓吾本であるとし、李卓吾本と金聖嘆本との版本の優劣を論じて、李卓吾本のほうが原本に近いかもしれないが文章としては整理された金聖嘆本が良いとしている。前年に出た露伴の說をすぐに吸收する好學ぶりには驚かされるが、露伴の名前を一切擧げずに彼の「評說」の一部を引き寫していることについては、卷末の附錄も含め見るべきものが多い著述だけに惜しまれてならない。

彼らの『三國志演義』研究の水準は、間違いなく當時、世界の最先端であったと言えるであろう。中國でもまだ文學革命が起きておらず、魯迅、胡適などの本格的な小說史研究の始動はさらにそれよりも後である。せっかく明治末年に久保天隨や幸田露伴の努力で緒についた『三國志演義』研究と毛評本の譯業であるが、「庶幾はくは、以て三國演義和譯の成本となすを得むか。嗟乎、これ卽ち予が初志に外ならざるなり。」（「敍說」（八））という天隨の願いも空しく、當時の讀書界及び出版界では受け入れられなかったようである。毛評本の翻譯を『三國志演義』の譯本の決定版にしたいという天隨の初志は戰後にな

って一九五〇年代に小川環樹・金田純一郎譯や立間祥介譯などの毛評本の口語譯が完成し、ようやく眞に達成されたと言えるであろう。

また、久保天隨、幸田露伴の著作以外にも、博文館、共同出版、早稲田大學出版部、有朋堂、大川屋書店が『繪本通俗三國志』を刊行しているが、附錄などを除けば特に目新しさはない。

おわりに

もはや紙幅も盡きたので、大正から現代に至るまでの『三國志演義』の翻譯情況についてはまた機會があれば論じることにし、もう一度明治の翻譯出版狀況について整理しておきたい。明治一〇年以降に出版された『三國志演義』の翻譯は、再版されたものを含めると六四點あるが、出版された時期には偏りがあり、第一次高潮期と停滯期、第二次高潮期の三つに分けることができる。清水市次郎や小笠原書房、成文社、文事堂など各期に出された書籍と著者・編輯者・出版社の縺れ合った關係を解きほぐすことで、彼らが意外なほど相互に影響を及ぼしながら、明治期の『三國志演義』の出版文化に様々な形で關與していたことが明らかになった。なぜここまで錯綜しているかというと、そこには著者・編輯者・出版社間の熾烈な競爭があったからであり、それはつまり『三國志演義』がよく賣れる商品であったいうこと、そしてそれだけ讀者に歡迎されていたということの證左となろう。

『三國志演義』が明治期の讀者に好まれ、流行したことについては三つの理由・條件が考えられる。一つは江戸の遺產があったことである。元祿年間に『三國志演義』の翻譯は一應完成し、各種の繪本や節略本も作られており、明治に入って加速的に普及するための基礎は前時代にすでに構築されていたのである。

二つ目は出版側の條件である。明治の四十五年間、活字印刷の出版點數が增加の一途を辿り、結果的に廉價な『三國志演義』を出版できていた。第一次高潮期では四圓から六圓が相場であったのに對し、第二次高潮期では帝國文庫のようにその四分の一以下の價格で購入できるようになったことは讀者にとっても利點が大きい。政治狀況によって古典覆刻ブームが何度か起きたことも出版界への後押しとなったであろう。

三つ目は書物を受容する讀者層の形成である。恐らく日本史上類がない明治期の急速な識字率の向上が、『三國志演義』の翻譯を含む日本近世文學の啓蒙普及に一役買ったのではないだろうか。明治三二年（一八九九）以降、明治政府は壯丁教育程度調査と呼ばれる讀み書き能力の檢査を實施しているが、明治三二年には識字能力に疑問がつく青年は四九・四％と約半數いたのに對し、大正四年（一九一五）には一・七％にまで減少している。青年男子という限られた對象ではあるが、筆者の知る限り『三國志演義』の翻譯本を家藏していたのは全て男性であったことから、『三國志演義』の場合、識字率の向上は一定程度讀者層の擴大に繫がったであろう。[14] 結局、本稿で見てきたものは、近代國家建設に邁進した明治という時代特有の文化現象であったのかもしれない。

中國では宋元以降多様な三國志物語が生まれ、それらの物語と歷史書の記述を正統思想や分久必合の歷史觀によって束ねあわせたものが現在の毛評本の『三國志演義』であり、これが言わば三國志物語の最終形態として高く評價され、中國教育部の選定した名著の一つに數えられるなど國家のお墨付きで「經典化」している。

しかし日本でも『三國志演義』は四百年の長きにわたって翻譯文化や二次創作を生み出し續けており、舶來の外國小說でありながらいつの間にか國民文學としての地位をしっかり築いていた事實を再認識させられる。『三國志演義』が中國において名著であり古典であることは否定しないが、日本においても江戸から明治の先人たちが作り上げた『三國志演義』の翻譯を自國の「古典」と見なし、再評價すべき時に來ているのではないだろうか。

注

（1）長尾直茂『本邦における三國志演義受容の諸相』（勉誠出版、二〇一九年）、梁蘊嫻「『繪本三國志』の插繪における合戰場面の「動」と「靜」―『三國志演義』寶翰樓本の受容を中心に―」（『鹿島美術財團年報』二六號、二〇〇八年）など參照。

（2）前掲注（1）長尾書一五八～一六一頁、「大橋義武「日本における『三國演義』の文學史的評價――その內容及び中國の文學史家への影響について」（『三國志研究』第一三號、二〇一八年）、上田望「日本における『三國演義』の受容（前篇）―翻譯と插圖を中心に」（『金澤大學中國語學中國文學教室紀要』第九輯、二〇〇六年）、同「古典の「再興」から「再考」へ―日中兩國における『三國志演義』の受容を手がかりに―」（『「古典」は誰のものか―比較文學の視點から―』所收、金澤大學人文學類、二〇一三年）など。

（3）梁蘊嫻「清水市次郎出版『繪本通俗三國志』の插繪についての考察」（『第四二回國際日本文學研究集會會議錄』二〇一九年三月）八二頁。

（4）鈴木敏夫『出版』（出版ニュース社、一九七〇年）「第一部明治前期」、牧野正久「年報『大日本帝國內務省統計報告』中の出版統計の解析（上）（下）」（『日本出版史料』）第一號・二號、日本エディタースクール出版部、一九九五・一九九六年）を參照。また、明治期における書物の裝幀については、遠藤律子、宮崎紀郎「明治時代の書物の裝幀―印刷および諸技術の發展との關わりから見た裝幀の變遷（一）」（『デザイン學研究』五三（五）、二〇〇七年）が裝幀の變遷を三つの時期に分けて分析しており、示唆に富む。

（5）前掲注（4）鈴木書二〇頁。

（6）前田愛『近代讀者の成立』（前田愛著作集第二卷、筑摩書房、一九八九）六〇～六二頁參照。

（7）例えば、前掲注（4）鈴木書一二〇頁。

（8）高島俊男『水滸傳と日本人』（大修館書店、一九九一年）「第一章　明治の水滸傳概況」參照。

（9）前掲注（8）高島書二三七～二四一頁。

（10）前掲注（3）梁論文參照。

（11）前掲注（3）梁論文九一頁では、菱花堂は恐らく代金の高い格上の年方に插繪を依賴したことから、清水から依賴された『繪本通俗三國志』の出版を重視していたのではないかとする。

（12）小林忠・大久保純一編『浮世繪の鑑賞知識』（至文堂、二〇〇〇年）「芳春（よしはる）」の項參照。

（13）前掲注（8）高島書二五五～二五七頁。

（14）齋藤泰雄「識字能力・識字率の歷史的推移――日本の經驗」（廣島大學教育開發國際協力研究センター『國際教育協力論集』第一五卷第一一號、二〇一二年）の三章「壯丁教育程度調査による讀み書き能力の推計」を參照。

【表１　明治期『三國志演義』翻譯年表（稿）】

出版時期	書名	編者	出版社	所藏
明治 10 年 1877	通俗演義三國志	永井德鄰和解	東京：	國圖、東大圖、上田ほか
明治 15 年 1882	繪本通俗三國志	清水市次郎和解	東京：清水市次郎、菱花堂	國圖、鶴見大圖
	繪本通俗三國誌	岩城勝藏翻刻	東京：著作館	國圖、東大圖、東大東文研、上田
明治 16 年 1883	繪本通俗三國志	中村頼治增補	東京：東京同益出版社	國圖、鹿兒島大圖、上田
	通俗繪本三國志		東京：潛心堂、小笠原書房、前田長善	國圖、弘前大圖、上田
	通俗三國志		東京：鈴木義宗、武田政吉	國圖
	繪本通俗三國志	清水市次郎和解	東京：清水市次郎、看可樂堂、漸進堂 法木德兵衛、武田平治、菱花堂	上田、鶴見大圖
	通俗繪本三國志	清水市次郎和解	東京：武田平治	上田
	三國志銘々義傳	烏越安久里之助編	東京：東洲堂	國圖
明治 17 年 1884	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂、小笠原書房（初版）	上田
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂、小笠原書房（初版）	國圖、同志社大圖、立正大圖
	通俗三國志	内山昇翻刻	長野：信濃出版會社	國圖　上田
	繪本三國志	大川新吉編	東京：大川新吉	國圖
明治 18 年 1885	通俗繪本三國誌	月の舍秋里編述	東京：覺張榮三郎	國圖
	通俗繪本三國誌	月の舍秋里編述	東京：覺張榮三郎	國圖
	通俗繪本三國志		東京：成文社（A）	國圖、國文研
	通俗繪本三國志		東京：鶴聲社	國圖、高知大圖、立正大圖、上田
	通俗繪本三國志		東京：成文社（B）	國圖
	通俗繪本三國志		東京：成文社（C）	上田
	三國志	小宮山五郎編	大阪：鹿田源藏	國圖
	繪本三國志小傳	武田平治編	東京：菱花堂	國圖
明治 19 年 1886	通俗繪本三國誌	月の舍秋里編述	東京：覺張榮三郎、上田屋（第２版）	金澤大學　上田
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂（第２版）	國圖、國文研
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂（第３版 A）	國圖
	通俗繪本三國志		東京：文事堂（第３版 B）	上田
	通俗三國誌		東京：金盛堂、菊屋幸三郎	上田
	繪本三國誌	尾關トヨ編輯		上田
明治 20 年 1887	通俗繪本三國志		東京：文事堂（第４版）	國圖
	繪本通俗三國志		青柳國松	國圖
	通俗三國志		東京：金泉堂書房	國圖、國文研、上田
明治 21 年 1888	通俗繪本三國志		東京：銀花堂、野村銀次郎	國圖、同志社大圖、上田
	繪本三國志		牧金之助	國圖
明治 22 年 1889	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂（第３版 C）	上田
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂（第３版 C）	上田
	通俗繪本三國志	月の舍秋里編述	東京：覺張榮三郎、中川米作、漫游會	上田
明治 23 年 1890	通俗繪本三國誌	月の舍秋里編述	大阪：柳澤武運三、偉業館、岡本支店	同志社大圖、立命館大圖、上田
	通俗繪本三國志		東京：銀花堂	國圖
	通俗繪本三國志	月の舍秋里編述	東京：銀花堂	上田
明治 24 年 1891				
明治 25 年 1892				
明治 26 年 1893	繪本三國志		東京：聚榮堂、大川屋書店、大川錠吉	所藏機關未確認
	校訂通俗三國志		東京：博文館（第１版）	所藏機關多數
	繪本三國志		河井源藏	上田、花園大圖
明治 27 年 1894				
明治 28 年 1895	通俗繪本三國誌	月の舍秋里編述	大阪：偉業館、岡本仙助	上田
明治 29 年 1896	校訂通俗三國志		東京：博文館（第２版）	第 15 版奥付
明治 30 年 1897				
明治 31 年 1898	三國志（講談）	桃川燕林講演	文事堂	國圖、上田
明治 32 年 1899				
明治 33 年 1900	支那小説譯解 三國志演義	馬場讓得閑、井上碩田 （新一郎）譯解	東京：東海義塾	國圖
明治 34 年 1901	繪本三國志		東京：聚榮堂、大川屋書店、大川錠吉 （第２版）	上田
明治 35 年 1902	校訂通俗三國志		東京：博文館（第５版）	第 15 版奥付
明治 36 年 1903				
明治 37 年 1904				
明治 38 年 1905				
明治 39 年 1906	三國志演義	久保天隨	東京：隆文館	國圖
明治 40 年 1907				
明治 41 年 1908	校訂通俗三國志		東京：博文館（第 11 版）	國圖
明治 42 年 1909	校刻通俗三國志	顚溪學人校	東京：共同出版（初版）	國圖　東大圖
	校訂通俗三國志		東京：博文館（第 11 版）	國圖
	校訂通俗三國志		東京：博文館（第 12 版）	第 14 版奥付
	繪本三國志		東京：聚榮堂、大川屋書店、大川錠吉 （第５版）	上田
明治 43 年 1910	校刻通俗三國志	顚溪學人校	東京：共同出版（第２版）	上田
	校訂通俗三國志		東京：博文館（第 13 版）	第 14 版奥付
明治 44 年 1911	三國志物語	伊藤銀月	東京：日高有倫堂	國圖
	通俗三國志	幸田露伴校訂	東京：東亞堂書房	東大圖、九大圖、明治學院大圖、 國圖、上田
	通俗三國志		東京：早稻田大學出版部	所藏機關多數
	校訂通俗三國志		東京：博文館（第 14 版）	上田
	明治 45 年 1912	新譯演義三國志	久保天隨譯補	東京：至誠堂
	通俗三國志	石川核校訂	東京：有朋堂書店（初版）	所藏機關多數
	通俗三國誌	月の舍秋里編述	東京：大川屋書店、大川錠吉	上田
出版年不明	通俗繪本三國志		東京：成文社（D）	上田
出版年不明	通俗繪本三國志		東京：成文社（E）	上田

【表２　清水市次郎和解『繪本通俗三國志』の諸本】

	上田望架藏本Ａ	國會圖書館藏本	上田望架藏本Ｂ	鶴見大學圖書館藏本Ａ	鶴見大學圖書館藏本Ｂ
卷１ 1-3	清水・法木 明治15.4.26屆 9.26別製本屆　全50册	清水・法木 明治15.10.25屆 全50册	清水・法木 明治16.3.25屆　全50册		清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷２ 4-6	清水・法木 明治16.3.25屆　全50册 １册４錢	清水・法木 明治16.3.25屆　全50册			清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷３ 7-9	奥付無し	清水・法木 明治16.7.7屆　全50册		清水・法木 明治16.3.25屆　全50册	
卷４ 10-12	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册		清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷５ 13-15	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	
卷６ 16-18	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	
卷７ 19-21	清水・看可樂堂 明治16.12.17屆 全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	
卷８ 22-24	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27屆　全15册	
卷９ 25-27	清水・看可樂堂 明治16.12.17屆 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17屆 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17屆 全15册		清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷10 28-30	清水・看可樂堂 明治16.12.17屆 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17屆 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17屆 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12屆　全15册	
卷11 31-32	清水・菱花堂 明治16.12.17屆 全15册	清水・菱花堂 明治 16.12.17屆 全15册	清水・菱花堂 明治16.12.17屆 全15册		清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷12 33-35	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆　全15册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆　全15册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆　全15册		清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷13 36-38	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆　全15册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆　全15册			清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷14 39-41	奥付無し	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册			清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷15 42-44	奥付無し　封面「大蘇芳年口繪　繪本通俗三國志　東京 菱花堂發兌」	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册		清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷16 45-47	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册		清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册
卷17 48-50	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11屆 大蘇芳年口畫　全17册			清水・武田・菱花堂 明治十□年屆 大蘇芳年口畫　全17册

【表３　成文社と鶴聲社の『通俗繪本三國志』】

版	卷册	出版年 明治 18	行數・文字數	全卷（頁）	價格	所藏	シリーズ	生田署名
成文社Ａ	30 册（６册）	１・５出版	15 行 45 字	1551	３圓	國圖、國文研	國民の本筐	有
成文社Ｂ	２册	６・20 屆	15 行 45 字	1551	３圓	國圖	國民の本筐	有
成文社Ｃ	２册	６・20 屆	15 行 45 字	1551	印無	上田	無	無
成文社Ｄ	２册、存１册	不明	15 行 45 字	上 808	不明	上田	國民の本筐	有
成文社Ｅ	２册、存１册	不明	15 行 45 字	下 743	不明	上田	國民の本筐 帝國文庫	有
鶴聲社	２册	４・８屆	15 行 45 字	1551	４圓	國圖、高知大圖、 立正大圖、上田	無	無

【表４　文事堂の『通俗繪本三國志』】

	裝丁 册數	卷册	出版年 明治	行數・文字數	全卷 (頁)	上卷 (頁)	下卷 (頁)	價格	所藏
初版	洋裝２	上下	17・12	13 行 37 字	2104	1060	1044	２圓	國圖、同志社大圖、立正大圖
再版	洋裝２	上下	19・5	14 行 42 字	1808	956	852	４圓	國圖、國文研
３版Ａ	洋裝２	上下	19・11	16 行 42 字	1649	886	763	４圓	國會圖
３版Ｂ	洋裝２	上下	19・11	16 行 42 字	1620	854	766	４圓	上田
３版Ｃ	洋裝２	上元亨	22・1	19 行 42 字		687		４圓	上田
３版Ｃ	洋裝４	上元亨利貞	22・1	19 行 42 字	1306	687	619	４圓	上田
４版	洋裝２	上下	20・7	18 行 42 字	1391	720	671	４圓	